

<b>Title</b>	Captain Singleton について
<b>Author</b>	内多, 毅
<b>Citation</b>	人文研究. 13 卷 4 号, p.363-378.
<b>Issue Date</b>	1962
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

## Captain Singleton について

## 内 多 穀

## 一 テーマと構成

Captain Singleton の場面は、アフリカ大陸、西印度諸島、東印度諸島にまたがるのであるが、Singleton 船長の活動の根拠地は、アフリカの沖合のインド洋上にある Madagascar 島である。この小説の作者 Daniel Defoe が、この島を中心として、この小説の主人公 Singleton を活動させようとしたことと理由はどこにあったのであろうか。

Sir Walter Raleigh が、*"It is his [Philip II's] Indian gold that endangereth and disturbeth all the nations of Europe."*<sup>(1)</sup> といったのは、スペインの南アメリカの金銀鉱山独占に関連しての言葉であるが、この情勢は、一五八〇年に Philip II がポルトガルを合併することによって、ヨーロッパへの危機感を一層倍加することになった。イギリスの West Indies への関心は、このスペイン、ポルトガルとの連関において、一段と強くなってきたのである。そして、十六世紀の England of Shakespeare が十七世紀を経て、十八世紀の England of Queen Anne にうつっていくと、海外貿易の関心も移動して、East Indies がこれまでの West Indies にまざることも劣ることのない関心を集めることになった。<sup>(2)</sup>

一七二〇年の Captain Singleton において、Defoe が西印度諸島とともに、東印度諸島をも舞台として描き出していることは自然のことであろう。

それならば、マダガスカル島というのは、どういう意味があったのであるか。この頃における海外貿易には莫大な利潤



がともなったけれども、その利潤のすべてを、正式の国家がその手におさめていたわけではない。そのなかの可成りものは、海賊の手におちていった。Jolly Roger の旗の魅力はここにあった。この海賊の根拠地がマダガスカル島にあったのである。この海賊の勢力は印度洋は勿論のこと、アラビヤ海から紅海、地中海にのびていた。この海賊にはスペインも手をやいた。一五四一年、スペインの Charles V は、アフリカの地中海に沿った Algeria 国の港 Algiers を攻撃して失敗した。そしてそれ以来、この Moorish pirate の優位に挑戦しようとするものがなくなった。この Algiers の海賊の活躍のことは、*Captain Singleton* の冒頭において、この小説に織りこまれているのであり、Singleton がまた少年の頃、Newfoundland からの帰途 “Algerine rover” につかまるところがあり、この小説はここからはじまっているのである。」

Defoe の生涯の念願は、立ちおくれたイギリスの海外貿易を、すでに優位を占めていたスペイン、ポルトガル、オランダと肩をならべ、さらにそれを追い越すことであったのであり、彼は、このためには、スペイン其他の貿易上の先進国のなかに割りこんでいこうとするともに、マダガスカル海賊たちのなかに割ってはい入ることもあえて辞すべきでないという主張をさえ抱いたのであろう。この小説において、マダガスカル、西印度、東印度が、物語の舞台としてとりあげられてくるのはこのためと考えられる。

*Captain Singleton* はマダガスカル島を中心として、アフリカ大陸における Singleton の活動と、西印度及び東印度における海上での活動とにわけられている。アフリカ大陸における陸上における活動の部分（第一頁から第一二二頁まで）を第一部と呼ぶならば、東西両印度の海上における活動の部分（第一二二頁から第二四四頁まで）は第二部と呼ぶことが出来る。第一部は、アフリカ大陸で黄金を採集することが主要部分をなし、第二部は海賊として黒人奴隷、織物、香料を掠奪することが主要部分をなしている。

この小説において、この小説の作者 Defoe が、主人公 Singleton についていう経路をとらしめたことの動機の一つとして、Woodes Rogers の一七〇八—一一年の世界周航の経路とは、<sup>(4)</sup>殊更ちがった経路をとるようにしていることを考える



のは誤りであろうか。

こうしたテーマにもとづいているこの小説は、どういう構成になっているのであるか。つぎにこのことを述べてみたい。

〔第一部〕 この小説は、Defoe の他の小説と同じように、主人公が一人称で物語る形式をとっている。主人公が物語るところは大体つぎのようである。Singleton は二才の頃に、人とりにとらえられ、転々として主人をかえていくが、やがて、ポルトガルの老パイロットのもとで、インドの Goa 行きの軍艦に乗りこむことになった。その船はブラジルの海岸沿いにインドに向うのである。

リスボンを出てから約七カ月でインドのゴアにつき、ここに八カ月滞在し、やがて航海をつづけ、マダガスカル海岸に投錨することになった。ここで船内に叛乱がおき、その後始末として、二十七人のものが船を離れて小島に籠城することになり、この二十七人は民主的な共同生活をやるういうことになった。

この島に籠城した二十七人が、まず最初に考えたことは、この島をどうして脱出するかということであり、これについてお互に意見を交換するが、結局、Canoe をつくって、この島の四周を偵察してまわることになった。この偵察の間に、Canoe は風のために北へおし流されて、ついにマダガスカルの島影も見えないようになり、やがて、アフリカ大陸の Mozambique に上陸することになった。「ここで考えてみなくてはならぬことは、マダガスカル島はアフリカ大陸の東方海上にある島であるが、マダガスカル島とアフリカ大陸とは、植物分布、動物分布上何等関係がないし、島の住民はマラヤ、インドネシアの系統であることである。こういう無関係のアフリカ大陸へ、この小説の主人公を漂流させることの思いつきのもつ意味を考えてみなくてはならないであろう。」

Mozambique に上陸した Singleton たちは、アフリカ大陸を横断して黄金海岸へ出ることを試みるが、これは、うまくすると黄金の山に出会わすことに希望をつないでのことなのである。



このアフリカ大陸横断の旅の間に、土着民との間に戦闘がたたかわれるが、Singleton が同僚を指揮して勝利を得たことを同僚たちも認め、それ以来彼のことを *Seignior Capitano* と呼ぶようになり、それから *Captain Singleton* という呼び名がはじまることになった。

このアフリカ大陸横断旅行での最大の難路は、砂漠の横断である。広漠としたなかに、緑は何一つ目にはいってこない。猛獣が咆吼するばかりである。そして砂漠の砂が深いので “walk” というよりか、“wade” という方が適切である。昼は焼けつく砂に悩まされ、夜は狼とライオンの咆吼におびえ通した。

砂漠を三十四日間、約四〇〇哩を歩き、ついにそれから三日間旅をすると、*Golden River* にやしかかり、ここでは最初の一日で三十四ポンドの黄金を採集することができた。さらに前進して愈々黄金海岸に出るのであるが、その途中、一人のイギリス人に出会う。その案内で道を急ぐことになるが、その途中にも川で砂金を採集することを忘れない。

Singleton は一同とわかれて黄金海岸にある *Cape Coast Castle* に行き、そこから乗船してイギリスに向い、やがてイギリスに帰りつくところで、いわば第一部とも称すべき部分は終っている。

〔第二部〕イギリスで二カ年ほど暮すうちに、アフリカでためた大金をすっかり使いはたしてしまった Singleton は、再び、スペインの *Cadix* 行きの船に乗りこんだ。途中暴風雨をさけて *Groyn* に避難したが、*Harris* という悪党の親分と親しくなった。*Harris* は、この港に碇泊中のイギリス船の友人 *Wilmot* としめし合せて、そのイギリス船に叛乱をおこそうと企て、やがてその叛乱に成功し、*Captain Wilmot* のもとに錨をまいて出港した。

スペインの *Cadix* 〔ハビ〕はスペイン商人の海外貿易の根拠地として有名であるが、海外貿易のなかの可成りのものは、名儀はスペイン人であっても、実質はイギリス人によって行なわれていた現実に注意しなくてはならぬ。〕に立寄り、ここで武器、弾薬、酒類を積荷し、アフリカ西海岸の *Canaries* を経て、西印度諸島に行き、ここで約二カ年、主としてスペインの商船を襲って海賊をはたらき、160,000 pieces of eight をためこんだ。



“Rich” になるとときには “strong” になろうとした。Virginia でつくられた brigantine、スペインの大型の frigate-built ship を拿捕したりした。

Pennsylvania から Barbados への航海中に一艘の “sloop” を拿捕したが、そのときに一人の Quaker 教徒を捕虜にした。William Walters という Surgeon である。このクエーカー教徒を同船させて航海をつづけることになった。

Singleton たちの海賊行為が有名になり、イギリスの軍艦が逮捕のために派遣されたという情報があるので、Singleton たちは、Carthage, St. Martha, Curagoa, などを転々として、集合点として指定しておいた Tobago (『ロビンソン・クルーソー』における孤島の描写のモデルとなったといわれる島である) に帰ってきた。

これから、西印度諸島を去り、Brazil 海岸へ進み、Janeiro 河口附近で、ポルトガルの軍艦を拿捕し、この軍艦の船長に Singleton がおさまり、航海をつづけ、途中、六〇〇人の奴隷をのせている奴隷船を手にいれ、クエーカー教徒の William Walters の商才によって Planters に有利に黒人奴隷を売りつけ、60,000 pieces of eight を儲けた。

やがて東印度諸島水域に舵をとり、Cape of Good Hope を通過し、マダガスカル島を北上し、Arabian Coast, Red Sea 水域で海賊を働き、マダガスカル島の集合点にとってかえした。この時には、“two ships” と “a sloop” とをもち、乗組員も三二〇人を擁していたが、マダガスカル島で、より整備をして、この島を出港する時に、Singleton の乗っている船には四四門の大砲を積み、四〇〇人の乗組員をもっていた。そして sloop には、このほかに八〇人の乗組員が乗っていた。

それから、アフリカの海岸沿いに北上し、季節風を利用しつつ、Ceylon 島をまわり、Coromandel の海岸に向かい、危険な Bay of Bengal を避けて Sumatra に出ることになった。Dutch Spice Islands であればまわろうという魂胆である。Banda Islands, Ternate 島、Dumas 島などで、nutmegs (にくずく花。香料) cloves (ちようじ。蕾をほして香料にする) などを手に入れようとはかる。それからミンダナオ、マニラに赴き、マニラの北方水域では、三艘の日本船を拿捕した。ここから台湾に舵をとる。台湾沖で拿捕した支那のジャンクの提供した情報によって、台湾には Tonquin から



の大型船がはいる筈であり、それは、Spices とヨーロッパ商品とを買おうとしていることがわかったので、Singleton たちは海賊から商人に早がわりして取引をし、これで得た黄金は fifty thousand ounce good weight 以上にのぼった。

やがて、台湾、ミンダナオ、ニューギニア、ジャバ、セイロン、Goa, Surat を経て、集合点であるマダガスル島に向う筈のところ、集合点に向うことよりか、イギリスに帰国することを考えるようになる。Singleton は愈々帰国するとなると、急に、これまでの行いを悔いて、ピストル自殺をしようと考えたりさえするのであるが、クエーカー教徒である William Walters に諭されて思いとどまる。

Bassorah から陸路 Caravan に出て砂漠を通過し、Aleppo を通り、エジプトのアレキサンドリアに到着し、それからヴェニスに向け乗船し、イギリスに帰り、William Walters の妹と結婚をした。

## II Robinson Crusoe から Captain Singleton へ

Robinson Crusoe が書かれたのが一七一九年、Captain Singleton が書かれるのは、その翌年の一七二〇年である。執筆の年代がつづいていくように、このふたつの作品には内容的にも連絡があるように思われる。ロビンソン・クルーソーがロンドンに帰着するのが一六八七年で、東印度へ“a private trader”として出かけて行くのが一六九四年である。そして少年 Singleton が、Newfoundland から帰途“Algerine rover”につかまるのが一六九五年であり、Robinson Crusoe が終るところから Captain Singleton がはじまっているように思われる。「この関係は、Moll Flanders と Roxana との関係によく似ている。」この二つの小説の内容的のつながりは、ただ物語のおかれた年代上のつながりのみではなく、もっとふかい関係があるように思われる。

Captain Singleton は、傑作 Robinson Crusoe のつぎに書かれた駄作のように考えられ勝ちである。Edward Garnett が“... it is safe to say that out of every thousand readers of Robinson Crusoe only one or two will have even heard of the



*Memoirs of a Cavalier, Colonel Jack, Moll Flanders, or Captain Singleton.*<sup>(5)</sup> といふときには、このことが含まれているのであろう。しかしながら、この小説は決して無視されてよい作品ではない。*Robinson Crusoe* のつぎに執筆された作品として、*Robinson Crusoe* の芽をちゃんとばしているのである。このことをわれわれは見逃してはなるまい。

Captain Singleton が *Robinson Crusoe* の延長線にあるといふことの第一の点としてあげるべきことは、*Robinson Crusoe* では全くの個人しか描かれていないのに対して、Captain Singleton では、fellowship の芽ばえが可成り顕著にでていることである。この物語の初めの部分で、マダガスカル島沖で、船内で謀叛をしたものや、それに同情をした二十七人のものが、小さい島に置き去られることになるが、これらは、民主的な共同生活をやろうと誓いあふ<sup>(6)</sup>。そして彼等は、アフリカの大砂漠を横断して黄金海岸に辿りつくまで、ついにこの fellowship をすてなかった。こうした人間関係の描写は、*Robinson Crusoe* には見られないところであり、一つの展開と見なくてはならない。

こうした人間関係が、かなり困難な状況下においても、持続せしめられるが、これには humility があつかつて力あることを見のがしてはなるまい。Singleton よりかはるか年長の gunner が、Singleton の統率の実力を認めて、彼を指導者に推戴しようと動議をしても、Singleton は若すぎるからと辞退し、むしろ gunner を指導者に推そうとし、結局、gunner と Singleton との二人が“leaders”<sup>(7)</sup> になるが、こういうところは、*Robinson Crusoe* が孤島の王者として君臨するのとは大いに異なっているところである。

*Robinson Crusoe* には「勤勉」はあるが、humanism は稀薄である。Xury や Friday の取扱いはこのことをはっきり物語っている。これに反して Captain Singleton では humanism がはっきり打ち出されてきていると言える。Singleton の一行が旅をする途中では、平和的な土着民を殺すことをきびしく禁止しているところがある<sup>(8)</sup>。そしてアフリカ大陸を横断するのに使用した黒人の王子を、最後には自由にしてやり、そしてちゃんと着物をきせ、一ポンド半の黄金の分け前をやつて、円満にわかれていく<sup>(9)</sup>。また、行方不明になった同僚をあきらめることなく、徹底的に捜し出そうとして、行方



不明の Captain Avery を約一週間程もかかって捜し出してくるところもある。<sup>(10)</sup>

つぎに Captain Singleton において著しい点は、William Walters というクエーカーの外科医がこの小説の後半に登場してきて、ある意味では Singleton ではなしに、この William Walters が、この小説の主人公であるという感じを抱かせさえする程である。クエーカーの人物は Robinson Crusoe にはあらわれず、Moll Flanders や Roxana など、後の作品にあらわれるものであり、この意味でも注意すべき一つの側面をなしていると言えよう。

Captain Singleton を Robinson Crusoe に比較した場合、相違しているところは、Robinson Crusoe の世界が 'adventure' の世界であるのに対して、Captain Singleton のそれは 'trade' の世界が中心をなしていると言うことができる。

Robinson Crusoe 第一部は、クルーソーが孤島に二十八年余りを過してからロンドンに帰り、東印度諸島へ 'private trader' として出かけるところで終っているが、この 'trade' を Captain Singleton —— 特に後半では全面的に —— では前面におし出してきている。Captain Singleton は、たんなる 'energy' と 'curiosity' との結合としての 'adventure' ではなしに、ちゃんと採算をあわすことを目的とする 'trade' の世界になりきっていることを注意すべきであろう。Singleton や他の乗組員たちが、ついうかつに 'adventure' 的な行動に出ようとしても、クエーカーの外科医 William Walters は、われわれのやることは、単なる冒険や戦闘ではなしに、'trade' であり、'money' だという意見を出し、その意見が結局勝を占める場合が何度か描かれている。Dumas 島を奇襲しようとする Singleton に対して、William Walters が、われわれは戦うのが目的でなく、商売するのが目的であるとして反対するのも、その一例である。<sup>(11)</sup>

以上のように、Captain Singleton は、その直前の小説 Robinson Crusoe とはいくつかの異なる点をもった小説であることが明らかであるが、この相違が最も集中的にあらわれるのは、William Walters なるクエーカー教徒の存在であるように思われるので、つぎにこのことについて考えてみたい。



## 三 Captain Singleton における William Walters なる人物について

Captain Singleton について注意すべき一つの点は、この小説の前半の統一は、Singleton によってあたえられているが、後半の統一は William Walters というクエーカー教徒の surgeon によってあたえられているということであり、さらに、この小説の前半の統一を生み出している Singleton も、後半との関連において考え直してみると、クエーカー的なところが多分にあることに気がつくのである。Captain Singleton は、海賊 Singleton の行動を物語るものではあるけれども、よく注意して読むと、たんなる海賊の物語ではなくて、そこにはクエーカー的な精神がにじみ出ていることがわかるのである。Captain Singleton という小説に、全体的な統一をあたえているのは、結局 William Walters というクエーカー教徒ということになるのであって、このことは Bonamy Dobrée も指摘するところである。<sup>(12)</sup>

William Walters は謙虚で慎重で、戦争反対で、世事にも通じ、船中の人望をあつめている。Singleton はじめ、乗組員たちはすべて、William Walters の意見に従う。そのために、この小説のなかでは、海賊の物語ということから当然予想されるような向う見ずの荒っぽい事件がまず見当らない。この点 Robinson Crusoe のなかに、海賊のはげしい場面が描かれていることは注意すべきであろう。作者 Defoe は、この小説をクエーカー的な気分で貫こうとしたのであるかも知れない。Defoe は、やむにも述べたように、海外貿易の後進国であるイギリスは、所謂海賊的な行動をとることはやむを得ないと考えたのであるが、その際、海賊的行為を、クエーカー主義で緩和することの必要と、そしてその可能性と有効性を、この小説で描き出そうとしているとも言える。そしてそうした実験を、William Walters なる人物によって試みているとも言える。このクエーカー教徒が活躍するのは、この小説の後半においてであるが、この小説の前半も、後半になって William Walters が活躍しても決してちぐはぐになることのない準備が予めととのえられているように思われる。かく考えると Captain Singleton という小説は、Quakerism によって全体の統一があたえられていると言うことができるのであろう。Singleton が William Walters に説得されて、海賊の渡世をきりあげてイギリスに引揚げるため



に、他の同僚たちとつぎつぎにわかれていくが、William Walters とは最後まで行動をともにするし、そのみでなく、ロンドンに帰って、William Walters の妹と結婚をして、義兄弟の関係を結ぶのである。クエーカー教徒 William Walters が、Captain Singleton で占める地位は非常に大きいと言わなくてはならない。

この小説にあらわれたクエーカー教徒の意味は以上のようなものであるが、作者 Defoe はクエーカー教をどのように考えていたのだろうか。Defoe は Dissenter であるが、そのなかでの分派としては Presbyterian の家庭で育ったのであって、

Quaker 派ではない。それならば、Defoe と Quaker との関係はどういうものなのか。

Quakerism は十七世紀におこり、それが唱えられた時にはなかなか優勢で、最初の十年間の 1650-1660 年で、四万人が Quaker movement に参加した程であった。<sup>(13)</sup> この宗派は、教会や僧侶の権威を認めない。<sup>(14)</sup> 聖書を唯一のよりどころとする

というよりか、極めて日常的な生活の一つ一つの行いのなかに神を見ようとするものである。<sup>(14)</sup> 即ち教会や聖書の権威の

‘infallibility’ を動かすことのできぬものとするのではなくて、神の愛を各人が体験することにこそ権威をおこうとするものである。<sup>(15)</sup> 従って、クエーカー教徒たちは、教会や聖書のために ‘enthusiasm’ におちいることがない。<sup>(16)</sup> あくまで ‘Common

Sense’ の埒内で処理しようとする。このことは、George Fox の行き方によくあらわれている。

Quakerism のこうした態度を、Defoe もうけいれていたのであろう。彼の経歴をたどってみても、イギリス国教会と覇を争う Presbyterian というよりか、底辺において静かに、おだやかに生きていこうとするクエーカー教徒のところが目につく。彼の生涯は、波らんにとんでいる。しかし驚くべきことは、彼が決してむきにならぬことである。論争において、むきになり、復讐的になるのは相手であり、彼は相手に、お静かにどうぞという側であった。このことは、彼が如何にも海千山千の論客で、相手を激昂させて、あげ足をとるといふ狡猾な人間であるようにも、一見、考えられるが、これはあたらないと思う。彼の気質の根本にクエーカーの平静さが存在したと考えたいのである。

こういう憶測はともかくとして、Defoe が Captain Singleton において、クエーカー教徒の William Walters を登場せ



しめることに直接関係ある具体的な事件があったのであろうか。このように考えてくる時に思い浮んでくるのは、偉大なるクエーカー教徒であった William Penn (1644-1718) が、*Captain Singleton* (1720) 執筆の二年前に死んでいることである。このことは、Defoe の記憶にあたらしいことであつたであらう。というのは、Defoe と Penn との間には、忘れることのできぬ個人的な関係があつたからである。一七〇三年、Defoe が *The Shortest Way with the Dissenters* を書いたために逮捕されて、Newgate の監獄にはいつていたと<sup>17</sup>、William Penn は Godolphin を通じて、Defoe の釈放に努力し、わざわざ牢にたづねて行きもした。Penn の努力は思うようには実を結ばなかつたけれども、Defoe は Penn に非常に感謝して、手紙を書きおくって礼を述べている。<sup>17</sup> この William Walters が *Captain Singleton* のなかで登場するのは、Pennsylvania から Barbados への航行中の sloop を Singleton が拿捕し、そのなかに William Walters がいたのであるが、この Pennsylvania は言うまでもなく、William Penn が開いたところであり、この人物を William Walters と名づけるところにも William Penn への言及と見ることができると思ふのである。

Defoe の小説には、この小説以外でも *Moll Flanders* や *Roxana* にも、クエーカー教徒が登場してくるし、またこの時代の popular literature にクエーカー教徒が顔を出してくることは、珍らしいことではなかつた。<sup>18</sup> このことは Defoe の小説を解釈するときに重要であり、Defoe を、gentleman にのし上ろうとする俗物精神の人間と考えるのではなしに、クエーカー教徒的生活態度の持ち主であつたとして考えた上で、彼の小説を解釈するときには、これまでの Defoe 解釈をやや大幅に修正する必要があるのではないか。在来、比較的閉却されてきた *Captain Singleton* を真面目に読めば、クルソー的人間とはちがつた人間としてのシングルトンの人間を見出すのであり、このことは、クルソー的人間のうえに成立した Defoe の小説解釈を、何んらか修正することの必要を提示する根拠になるであらう。



#### 四 Captain Singleton におけるいくつかの Episodes

以上述べてきたように *Captain Singleton* における小説としての統一はクエーカー教徒の William Walters によってあたえられていると言えるのであるが、しかしながらこのことは、この小説が求心的な、緊密な構成をもった小説だということの意味するものではない。この小説はいくつかの episodes がつなぎ合されて成りたつていているといった側面が見失なわれてはならない。この小説においては episodes のもつ面白さを離れては、この小説の評価はなりたないであろう。それならば、どのような episodes が特に読者の注意をひくのであろうか。つぎにそのいくつかについて述べてみたい。

(1) マダガスカル島附近の小島からアフリカ大陸にたどりつこうとしている時のことである。Singleton は canoe をつぐって島の周囲を巡航して、大陸へ渡るのに便利な地点を発見しようと努める。港にはいると、ここで腰を落着けたい気持が湧いてくる。しかし、いろいろと考えた末、航海を続けることにする。このあたりには、人生は旅だということを思わせる一抹の pessimism が漂う印象的な文章である。――

... we sat down and considered whether we would go on or take up our standing there; but upon several considerations,  
too long to repeat here, we did not like the place, so we resolved to go on a few days longer. (19)

“a fresh gale at S. E.” をうけて N. W. by N. に航海をつづけるうちに、海上に突出している長い岬を見つけた。これをつたっていけば、ひよっとするとアフリカ大陸にわたれるのではないかという希望を抱いた。そして四日間航海をつづけて岬のとつたんについた。ここで、筆舌につくせない程がっかりした。というのは、こちらの岬が出ばっているだけ、否、それ以上に、対岸の大陸は退いているのである。そして大陸は、そこからさきは愈々退いて、われわれの島と大陸との距離は大きくなるばかりである。岬のとつたんから一哩ばかりいりこんだ小山にのぼり、木で十字架をつくりポルトガル語



で “Point Desperation. Jesus have mercy.” という意味をかきつけた。このあたりの文章はつぎのようである。――

But it is not possible to express the discouragement and melancholy that seized us all when we came thither; for when we made the headland of the cape, we were surprised to see the shore fall away on the other side as much as it had advanced on this side, and a great deal more; and that, in short, if we would venture over to the shore of Africa, it must be from hence, for that if we went further, the breadth of the sea still increased, and to what breadth it might increase we knew not.

While we mused upon this discovery, we were surprised with very bad weather, and especially violent rains, with thunder and lightning, most unusually terrible to us. In this pickle we run for the shore, and getting under the lee of the cape, run our frigates into a little creek, where we saw the land overgrown with trees, and made all the haste possible to get on shore, being exceeding wet, and fatigued with the heat, the thunder, lightning and rain.

Here we thought our case was very deplorable indeed, and therefore our artist, of whom I have spoken so often, set up a great cross of wood on the hill which was within a mile of the headland, with these words, but in the Portuguese language :  
(20)  
Point Desperation. Jesus have mercy.

(2) ついにアフリカ大陸に辿りつくが、初めてみる新らしい大陸の景観の描写は読者の印象にも強く訴える文章であ

190 —

It was a vast howling wilderness—not a tree, a river, or a green thing to be seen; for, as far as the eye could look, nothing but a scalding sand, which, as the wind blew, drove about in clouds enough to overwhelm man and beast. Nor

could we see any end of it either before us, which was our way, or to the right hand or left; so that truly our men began to be discouraged, and talk of going back again. Nor could we indeed think of venturing over such a horrid place as that



could we see any end of it either before us, which was our way, or to the right hand or left ; so that truly our men began to be discouraged, and talk of going back again. Nor could we indeed think of venturing over such a horrid place as that before us, in which we saw nothing but present death. (2)

(3) *Captain Singleton* には、ところどころ pessimism が漂う場面が印象的であるが、この小説の世界は、抒情の世界ではない。とにかくにも、何千哩も歩いてアフリカ大陸を横断する物語である。その間には物珍らしい風物に出会して、その生彩に富んだ描写がある。その一つに象の大群の描写がある。象は群体生活をし、攻撃をうけると一列にならび、その列が五―六哩にも及ぶことがあるという。そしてそこへ外敵があらわれると、象は協力して、踏みつけてつぶしてしまふのである。獅子も虎も、この象の列は敬遠するといわれる。Singleton は約二、〇〇〇頭の象が一列にならんで行進するのを見たというのである。その文章はなかなか印象的である。

We saw abundance of elephants at a distance, and observed they always go in very good company, that is to say, abundance of them together, and always extended in a fair line of battle ; and this, they say, is the way they defend themselves from their enemies ; for if lions or tigers, wolves or any creatures, attack them, they being drawn in a line, sometimes reaching five or six miles in length, whatever comes in their way is sure to be trod under foot, or beaten in pieces with their trunks, or lifted up in the air with their trunks ; so that if a hundred lions or tigers were coming along, if they meet a line of elephants, they will always fly back till they see room to pass by the right hand or the left ; and if they did not, it would be impossible for one of them to escape ; for the elephant, though a heavy creature, is yet so dexterous and nimble with his trunk, that he will not fail to lift up the heaviest lion, or any other wild creature, and throw him up in the air quite over his back, and then trample him to death with his feet...and I believe there might be 2000



elephants in row or line.<sup>(22)</sup>

(4) ブラジルの Janeiro 河口に達して、港にはいろいろとすると、ポルトガルの軍艦が二艘、Singleton たちを逮捕にやってくる。夜になるのをさいわい、港にはいらす沖に碇泊をした。夜がけると、そのうちの一艘が、逮捕にやってくる。四十六門の大砲を装備した船である。Singleton は風上に進路をとり、ポルトガルの軍艦に砲撃をあげせることによって、混乱をひきおこしやがて敵船に乗りこんで、それを拿捕するところの描写は、この小説のなかでは、最も海賊的な場面と言えるのであるが、ここに注意すべきは、ここには Singleton の戦術の巧みさのみがあって、海賊的行為の惨虐さがなくことである。そしてこのポルトガルの軍艦を拿捕してから、残るもう一艘を攻撃にかかろうという意見を出すものがあつたが、クエーカー教徒の William Walters はそれに強く反対をする。理由は、われわれの目的はお金もうけであつて戦争ではない。われわれは軍艦を相手にしないで商船を相手にしようといふのである。そして結局 William Walters の意見が通るのである。そして De la Plata 川 (ブラジルの南、ウルグアイの南端) に向つて航行する銀をつんでいる船を目標にすることにした。<sup>(23)</sup>

(5) 台湾が見える海域にはいつてから、一艘の支那の junk を拿捕した。そして三人の支那の商人を逮捕した。この支那の商人の話によると、Tonquin から大きな船がはいる筈であり、それは、Silks, muslins, calicos 其他支那の物産をつんで、フィリピンに出かけ、そこで spices とヨーロッパの商品を購入しようとしてゐることである。Singleton たちは早速にこの船との交易を考える。William Walters は、支那人の三人の商人のうち二人を人質 (hostages) としてわれわれの船にとめ置き、残る一人をつれて、相手の船に乗りこみ、ここで取引をすませ、結局この交易で黄金を五万オンス以上儲けている。<sup>(24)</sup>

(6) 小説の筋には直接影響するところはないが、日本のことが物語られてゐるところがある。このなかに、日本に十三



人のイギリス人がいるということが述べられている。<sup>(25)</sup>

(7) このほかにも、刃物師の工夫、<sup>(26)</sup> carpenter が悠々として canoe をつくる描写、<sup>(27)</sup> 獅子に鹿をおわせて旅を慰めることや、<sup>(28)</sup> わにに喰いつかれる話や、<sup>(29)</sup> 銃尾で獅子をたたき殺す話や、<sup>(30)</sup> ものすごい雷光に見舞われて皮膚に火傷をする話、<sup>(31)</sup> 樹上の土民との交戦の描写、<sup>(32)</sup> 土民の火箭の攻撃を受けて船の帆が燃える物語り、<sup>(33)</sup> など、印象に残る episodes はその数が多く、Defoe の物語り技巧のたくみさをあらわしていると言えよう。  
(終り)

# 注

- (1) Ernest Barker (ed.) : *The Character of England*, 1947, p. 512.
- (2) *Ibid.*, p. 515.      (3) Daniel Defoe : *Captain Singleton*, Everyman's Lib. ed., p. 3.
- (4) Woodes Rogers の世界周航の経路は Bryan Little : *Cruoe's Captain*, 1960, pp. 52-53 によって知ることになる。
- (5) *Captain Singleton*, everyman's lib., p. v.      (9) *Ibid.*, p. 18.      (5) *Ibid.*, p. 50.
- (8) *Ibid.*, p. 61.      (9) *Ibid.*, p. 121.      (10) *Ibid.*, p. 160.      (11) *Ibid.*, p. 171.
- (12) Bonamy Dobrée : *English Literature in the Early Eighteenth Century 1700-1740*, 1959, p. 426.
- (13) R. Duncan Fearn : *Quakerism : A Faith for Ordinary Men*, 1951, p. 2.      (14) *Ibid.*, p. 28.
- (15) *Ibid.*, p. 35.      (16) *Ibid.*, p. 4.
- (17) *The Letters of Daniel Defoe*, ed. by George Harris Healey, 1955, pp. 7-8.
- (18) Bonamy Dobrée : *op. cit.*, p. 425.      (18) *Captain Singleton*, p. 29.      (20) *Ibid.*, pp. 29-30.      (21) *Ibid.*, p. 70.
- (22) *Ibid.*, pp. 78-79.      (23) *Ibid.*, pp. 132-136.      (24) *Ibid.*, pp. 175-177.      (25) *Ibid.*, pp. 177-179.
- (26) *Ibid.*, p. 24.      (27) *Ibid.*, p. 59.      (28) *Ibid.*, p. 78.      (29) *Ibid.*, p. 78.      (30) *Ibid.*, p. 80.
- (31) *Ibid.*, p. 171.      (32) *Ibid.*, p. 184.      (33) *Ibid.*, p. 206.

以上